

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370484

研究課題名(和文) 知的障害児・者の音楽的活動の場に見る発話の音楽性と対話活性化の関係

研究課題名(英文) How the musicality of utterances made in the setting of music-related activities stimulates communication among people with intellectual disabilities

研究代表者

有働 真理子 (UDO, MARIKO)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：40183751

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、知的障害児・者(コミュニケーションに困難な課題を抱える成人・高齢者も将来的には含む)の対話環境向上を社会貢献的な目標とし、知的障害児との語りや音楽活動等余暇活動を観察場面として取り上げ、言語学・発達科学・教育実践学の学際的な観点から、言葉の音楽性(音声発話)と身体運動(身振り・ジェスチャー)が対話促進に貢献する状況を実証的に観察・分析し、具体的支援方法の検討や提案につなげることを目標とした。研究期間内に、国際学会(2件)、全国レベルの学会成果発表(5件)、国際的な学会誌への投稿(3件)、社会貢献のためのセミナー主催(5件)、ウェブサイト構築と、ほぼ予定通りの実績を遂行できた。

研究成果の概要(英文)：The focus of this empirical study is to study specific practices that can stimulate communication with intellectually disabled people. The musicality of words and body movements (gestures) were observed and analyzed from the interdisciplinary fields of linguistics, developmental science and education practice, for connections between the music or storytelling activities and an acceleration of communication abilities. Observations took place in the classrooms and during leisure activities. Our findings suggest that an interactive musical environment with stories has the potential to improve the quality of life of intellectually disabled people by providing the means for growth in their ability to communicate. By making inroads into the lives of the intellectually disabled through these interactive musical activities, we can benefit from the increased contributions of the disabled by gaining a wider perspective as a society.

研究分野：言語学

キーワード：知的障害児・者の対話促進 多感覚 即興性 音声表現 ジェスチャー ストーリーテリング

## 1. 研究開始当初の背景

共同研究の源流は、平成16-18年度に基盤研究(C)(課題番号:16530436、「オノマトペにおける言語・認知発達と教育及び療育効果の実証的研究」、研究代表者石橋尚子)及び平成19年度実施の第2回博報「ことばと文化・教育」研究助成(助成番号:06-B-0028、「オノマトペ表現が促進する知的障害児の対話表出」、研究代表者有働真理子)に、研究の発想の萌芽を見ることができている。私たち学問的興味は、知的障害児の日常の対話場面の観察に基づき、言語能力にハンディのある子どもたちが、対話能力をどのように獲得して行くのか、また、障害児たちに関わる周囲の人々がどのようにして子どもたちの発達促進に寄与しているのかについて、感性言葉(例えば、オノマトペや感動詞)及び運動表現(ジェスチャー)の表出の有り様と相互関係を、観察・分析・考察することであった。

平成20-22年度の基盤研究(C)(課題番号20520357:「対話能力発達における身体性表現の役割 言語と体と音楽が出会うところ」研究代表者 有働真理子)では、日本語と同様にオノマトペの豊富な韓国語、および表現的感性の異なる教育文化を持つことが予測される韓国において、養護学校(特殊学校)の授業見学を行い、教師発話の映像データを収集の上、教師発話のオノマトペが出現する文脈に一定のパターンが見られることや、興味深い教室の場の現象が現れることを指摘した。また、知的障害者の即興音楽活動にも着目し、「どこいしょ」といった身体性の高い発話が、音楽家たちが適切に応答することによって音楽的な対話に昇華された事例を分析した。

研究成果の社会還元の実現に向けて本格的に取り組み始めたのは、平成23-25年度基盤研究(C)「対話困難の解決に貢献するオノマトペの運用と表現について」(研究代表者:有働真理子)を立ち上げてからであった。生活技能上重要性の極めて高い歯磨き支援促進のために、音楽療法士の支援を得て、オリジナルの自作自演DVD教材を作成し、マルチモーダル支援教材や芸術性の高い音楽療法活動の中で促進される対話行動や、参加者の関係性について研究を進めた。

さらに、対話と音楽性の関係に関しては、「神戸音遊びの会」という知的障害者らの参加する即興音楽バンドの活動に着目した。この会は国内外の公演の実績を重ね、演奏家や研究者の関心を集めたもので、Brynjulf Stige and Leif Edvard Aaro (2011)において世界各地の特記すべき音楽療法活動6事例の1つとして紹介されている。そういった流れもあり、英国の知的障害者を支援するストーリーテラーである Nicola Grove 氏が音遊びの会ロンドン公演に出向いたことで1つの出会いが生まれ、これが本研究において音楽活動における対話の実践を観察する場を提供するこ

とにつながった。

## 2. 研究の目的

本研究は、知的障害児・者(コミュニケーションに困難な課題を抱える成人・高齢者も将来的には含む)の対話環境向上を社会貢献的な目標とし、言語学・発達科学・教育実践学の学際的な観点から、言葉の音楽性(音声発話)と身体運動(身振り・ジェスチャー)が対話促進に貢献する状況を、実証的に観察・分析し、具体的支援方法の検討や提案につなげることを目標とした。知的障害児の教室や音楽活動等余暇活動における対話場面を観察し、知的障害児と教師・養育者・ケア担当者の関係の中で、どのように身体性の高いコミュニケーションが行われるのかを、オノマトペなど音声で表したときに表現効果の高い発話を中心に、動画・音声・談話の分析を組み合わせた研究を進め、具体的な支援方法・教材の開発につなげることを最終的な目標とした。授業や社会参加の具体的な関係形成の中での対話のリアリティをふまえて、研究の社会貢献の具体的な検討にも直接繋がる方法、即ち、知的障害児・者と教師・ケア担当者のやりとりがダイナミックに対話を展開して行く様子を詳細に観察することこそ、知的障害児の言語能力が(周囲が対話を理解することが困難であるために)過小評価されやすい状況に対して、学術的見地から尊厳の回復に貢献し、教育的・社会的に意義深いと考えた。

## 3. 研究の方法

申請時に掲げた「最終的な目標」としての社会貢献に向けて、研究期間中に確信を持ち、終了後間もなく教材・支援方法開発等の形にするため、観察対象となる実践の場が、研究内容の質を決めるものになるだけでなく、その先に求める支援方法・教材開発に向けて、十分に興味深い示唆が得られる場を選ぶことが重要な鍵となった。活動観察の場の設定は、本研究の企画を立ち上げる際に、成果還元の見込みをある程度肯定的に予測して行われたものである。

場の設定及び観察の視点については、知的障害の言語対話能力発達についての、本研究の理論的立場や学問的姿勢に基づいている。一般に、言語発達研究においては、乳幼児を対象とした定型発達についての認知心理学的研究が多いが、知的障害児については、障害特性のあり方の多様性ゆえに、認知発達パターンの基盤となる科学的根拠を探求するよりも、切実な動機として、療育・教育の方法を研究することに重きが置かれることが多い。しかし、特別支援に関する研究課題のこの種の偏りは、私たち人間の認知発達の可能性の解明を考えると、もったいないかもしれない。というのも、生成文法理論が主張する自然言語の普遍性に関して、標準的なパタン

がどこまで、どの程度まで、拡張・調整されるのか、あるいは、厳しい制約条件の中で普遍的性質のどのような特質が生き残るものであるかといったことについても、示唆を与えてくれる研究領域となるはずだからである。文法能力発達のスパンが比較的スピーディで一定した発達過程を辿る定型発達児と異なり、知的障害児は、発達のスパンが多様で緩やかであり、個別に独自の発達過程を辿るため、一定数の人数を必要とする統計的手法は馴染まず、一人一人に時間をかけたきめ細かな観察に基づく質的研究の手法を採用することにより、原初的な対話行動現象の解明に寄与することが期待できる。

ことばの音楽性と身振りの間にどのような対応関係があるのかについては、発達心理学や認知科学の基礎研究を参照しつつも、実践の場でどういった現象が生じているのかといった、自然発生的な対話の諸相を観察することから手がかりを多く得られる。乳幼児期に母親などの保育者が子どもに語りかける言葉である育児語は、子どもとの対話の促進因子といえるが、ことばかけの中の音声的特徴(音楽性)や身体的な動き(運動性)の意味を考える発達心理学・認知科学等諸科学的研究的関心は高まる一方である(Delafield-Butt, 2013)。特にオノマトペの言語獲得への関わりへの関心は高く、オノマトペの要素を含んだ育児語が乳児の言語リズムの獲得に影響し、音象徴性やリズムカルな韻律で構成されるオノマトペを介在させる対話環境が対話を促進することや、ことばの発達を促すことを示唆する研究が進んできている状況をふまえ、本研究は、授業や社会参加の具体的な関係形成の中での対話のリアリティを観察データから読み取り、研究の社会貢献の具体的検討にも直接繋げることとした。知的障害児・者と教師・ケア担当者のやりとりがダイナミックに対話を展開して行く様子を詳細に観察することは、知的障害児の言語能力が(周囲が対話を理解することが困難であるために)過小評価されやすい状況に対して、学術的見地からリスクを回復することができれば、教育的・社会的に非常に意味があるからである。

#### 4. 研究成果

初年度(平成26年度)は、支援の手がかりが得られる可能性を感じさせる場面を取り出し、素材や要素のあり方を検討することに取り組んだ。前年度終了した研究費で自作した歯磨きDVD教材を活用している作業所に出向き、どのような言語表現が具体的に好まれ、繰り返され、歯磨き支援に役立っているかを観察した。また、IASSIDD(国際知的障害科学学会)ウーン大会において、DVD映像とは異なるマルチセンサー教材であるBagBooksという手法を取り入れて日本向けに加工したものの提案した。そこでは、海外の

研究者らと発表についての情報・意見交換を行ったが、中でも英国で活動するストーリーテラーと議論し、「語り」と音楽を連携させる共同実践企画を立ち上げたのは、次年度の展開を方向つける重要な成果となった。表現方法は様々に異なっている、「物語性」を盛り込むことで、言語表現の身体性の高さが意味のある表現効果として際立つが、このことは最も重要な点であると思われた。その他、3月下旬の日本発達心理学会において、年度末のまとめとして「ことばと音楽の融合」というテーマでラウンドテーブルを主催した。「物語性」の組み込みという、教育的な意義の大きい企画を、英国の活動実施状況を調査しつつ立案し、推進方法について年間を通して具体的に(成果物等を実際に作成したり、有効性の検証を試みたりしながら)検討することができた。また、学術的背景となる対話活性化場面の個別の分析については、3月下旬のラウンドテーブルにおいて、連携研究者や研究協力者との共同で、「音楽的な言語」、「言語の中の音楽」などの概念を、具体的談話現象に基づいて検証しつつ例示し、対話の教育的意味にも言及し、質的議論を展開できたので、目標に向けての大きな成果が得られたと判断している。

2年目となる平成27年度は、IASSIDDウーン大会において得られた意見交換がきっかけとなり、英国のストーリーテリングの専門家 Nicola Grove 氏との協働を本研究に連携させることが可能になったので、マルチセンサー的要素とストーリーテリングの関係、特に音楽や音楽的要素の関わりについて研究するために、独創的なセッションを実験的に企画した。言語表現が様々に異なっている、「物語性」を音楽性の高い身体的言語表現に組み合わせることにより、対話が飛躍的に活性化されるのではないかという仮説をたて、余暇活動ならびに学校教育(特別支援学校、小学校外国語活動、中学校特別支援学級の授業において、外国語(英語)の語りのセッションを、日本語の支援を交えて実施した。実践は、年度始め(4月末から5月中旬にかけて)と年度末(2月末から3月初旬にかけて)の2回に分け、同じ場所で実践を実施し、前述の仮説を現象的に検証した。新規性の高い対話環境においても、音楽性の高い発話は、知的障害児・者の語りの理解を助ける様子が観察された。

「物語性」を授業・余暇活動実践に実際に組み込み、その有効性について観察・考察する努力は精力的に実施され、対話的ストーリーテリングのセッション(特別支援学校3回、小学校外国語活動2回、中学校特別支援学級2回、音遊びの会ワークショップ実践1回、計8回の実践)を実施した。また、特別支援関係者(特別支援学校・学級教員、スピーチセラピスト、看護師、保育士、小学校・中学校教師)に、日本では十分に展開されていないストーリーテリング活動の教育的有用性につ

いて啓蒙し、情報・意見交換をするために、Nicola Grove 氏の他に、言語療法専門家 Victoria Joffe 氏 (ロンドン市立大学副学長)も招聘して、5月と11月に計3回のセミナーを実施した。学校訪問時の観察結果については、平成27年9月の第53回特殊教育学会大会において、自主シンポジウムを開催し、言語、教育、医療等の異なる視点から、実験的セッションで得られた知的障害児・者の対話性向上の成果について議論を行った。英国の活動実施状況を鑑みつつ、教育的社会貢献に資する研究活動企画を調整し、年間を通して具体的に推進したこと、また、今後の研究を継続しながら、対話促進のための実践教則本、ならびに日本の教育事情に適応させたストーリーテリング活用型の教育介入プログラムの企画を立ち上げられたことは、本研究の成果還元に関しては、予想を遥かに越える大きな成果であったと考えている。ただし、個別の対話活性化場面の談話分析や認知科学的考察を進め、学術的背景を整備することに関しては、議論の出発点としてのデータ収集と現象の質的観察を行った段階にとどまり、より詳細な分析が課題として残った。「音楽的な言語」や「言語の中の音楽」と「語り」の相互作用について解明することが、継承されるべき重要な課題として認識された。

3年目の平成28年度は、さらに、「物語性」を持って対話が交わされる場面では、音楽性の高い身体的言語表現が、対話の活性化に大きく貢献する様子について考察したことを質的に記述することを試み、成果発表として、論文作成の他、本研究の代表者(有働)、分担者(高野)が、連携研究者(沼田)、研究協力者(梅谷)と共に、第27回日本発達心理学会ラウンドテーブルを実施した。続いて、豪州メルボルンで開催された IASSIDD 世界大会において、オノマトペを用いた発話の効果や貢献について、口頭発表を行った。また、その年の9月に、第54回日本特殊教育学会研究大会において、本研究の代表者・分担者に加え、語りの専門家である光藤由美子氏、特別支援教育の専門性を有する教師である武田氏・上田氏による、語りの実践に関する自主シンポジウムを実施した。年度末の2月には、教育貢献に向けての研究会・セミナーを催した。

年間を通して、国際学会や全国規模の学会において議論の場を企画し、発表を実施したこと、また、年度内に4回の研究会・セミナーを実施し、情報・意見交換の場を設けたこと、さらには、分担者高野の助成金別枠(日本教育大学協会助成)により、英国の言語教育事情を調査するために渡航したことなど、最終年度の成果としては、社会貢献や今後の研究のための仕込みとなる活動を実施できたという意味で、豊かな成果が得られたと判断できる。しかし、平成29年2月下旬から3月初旬にかけて実施された研究会で学んだことを、対話促進のための実践教則本の基礎となるような形で報告をまとめるには、時

間が不足するタイミングであったため、研究期間を延長して、研究成果を振り返り、まとめる作業を平成29年度の課題として繰り返した。

経過と成果概要については上記の通りであるが、平成27年5月10日に、神戸音遊びの会(沼田里衣代表)の定期ワークショップにおいて、ニコラ・グロウプによる「かくや姫」の語り(英語)と、即興演奏のコラボレーションが行われたことについて付記しておきたい。日本語と英語を適宜交えて、語り手がお話を語る間に、メンバーの子どもたちが即興で、好きな音を奏で、セリフを語り手と共に発話するなどして、物語の展開を楽しみながら、積極的に参加した。語りと演奏が組み合わさった活動が展開される過程において、知的障害児・者の対話行動がどのように自然発生するか、どのような刺激がその働きかけになりうるのか、自分の表現への他者の反応を、障害児・者自身がどのように受け止め、次につなげて行くかといった、対話発生・展開の様々な示唆が得られた。

語りに合わせて、小道具や楽器の使用が促される案になっているが、即興であるので、結果に予定調和はない。下線部が障害児・者が活発に反応した箇所である。目論見通りのものもあれば、突発的(即興的に)生じた反応もあった。驚くべきことに、母語でない英語であっても、ジェスチャーや音声表現のインパクトが強く、また意味と調和しているものに対して、反応が活発になった。例えば、竹取のお爺さんが竹を切る場面で、‘chop, chop, chop, chop’と、動詞の繰り返しにより、無声破裂音の音象徴を活かした音声表現が、竹を切る動きのきっかけになっている様子があったが、音象徴の力を借りない、音と意味の間に有契性が担保されていない語彙においても、例えば、‘baby’や‘money’なども、物語の文脈情報と身体の所作から、子守唄の物悲しくゆったりした音の響きの中でいたいけな「幼子」の存在感や、せわしなく人を振り回し狂わせる「金銭」のイメージは伝えられていた。その他、‘Marry me’や‘Go away!’のような命令形の英語文表現も、懇願するような動作や、片手で相手をつっぱねるような動作と同期することにより、発話行為の意味が適切に伝わった上、さらに、子どもたちが同じ動作を添えてセリフを繰り返して楽しむ様子なども観察された。

伝えたい意味に合う、伝えたい意味を体でも表現するような、ジェスチャーと発話の同期現象については、会のメンバーが軽度・中度・重度の知的障害児・者の集まりだったことを鑑みると、彼らが外国語の発話を適切に解釈したことを重く受け止めるべきであるという考えに至る。このことは、将来的にインクルーシブな英語教育を考えると、大いに参考になるはずである。「知的障害のある児童生徒の外国語活動・英語教育に関する研究 英国の言語療法を援用した教育の提

案と課題整理」(平成28年度日本教育大学協会研究助成 ST16040001: 代表者 高野美由紀)という研究の実施により、私たちはプロジェクトをすでに始動させているが、発話と身振り(ジェスチャー)の融和、言語音の音象徴的な影響、それらが醸し出す物語の世界を共有することは、豊かな学びを与えてくれるものと信じる。対話性の高いマルチセンサー・ストーリーテリングの有効性を今後検証・実証し、福祉や教育に活用することは、障害の有無にかかわらず、子どもたちが健やかに育つための支援を可能にするということであり、今後の課題はそこに集約される。

#### <引用文献>

Brynjulf Stige and Leif Edvard Aaro (2011) *Invitation to Community Music Therapy*, Routledge.

Delafield-Butt, J. (2013) 'On the origins of intentions and development of meaning: sharing interests, feelings and purposes embodied narrative projects', FOUR WINDS Infant Mental Health Conference.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計3件)

Grove, N., Takano M., Udo M., Mitsudo Y. (2016) 'Heroes with a difference: legends and personal stories with Japanese school children', *The SLD Experience*, Issue 74, pp.3-5. 査読有

Udo M., Takano M., Numata R. (2016) 'Supporting people with intellectual disabilities through communicative performances in musical activities: towards recovery of self-respect and improved quality of life', *Journal of Intellectual Disability Research (JARID)*, vol.60, p.754. 査読有

Takano M. and Udo M. (2014) 'Trial production of Japanese-version multi-sensory stories for children with profound intellectual and multiple disabilities', *Journal Applied Research in Intellectual Disabilities (JARID)*, vol.27, p381. 査読有

##### [学会発表](計7件)

高野美由紀・有働真理子・上田直子・武田博子・光藤由美子 (2016) 「ストーリーテリングで特別支援(2)」日本特殊教育学会 第54回大会自主シンポジウム、朱鷺メッセ、新潟。

Udo M., Takano M., Numata R. (2016)

'Supporting people with intellectual disabilities through communicative performances in musical activities: towards recovery of self-respect and improved quality of life', International Association for the Scientific Study of Intellectual and Developmental Disabilities (IASSIDD) 15<sup>th</sup> World Congress, Melbourne Convention and exhibition Center, Melbourne.

光藤百合子・梅谷浩子・高野美由紀・有働真理子 (2016) 「特別支援学校における歯磨き指導の実践的研究 歯磨きソングやエプロンシアター、パネルシアターなどの研究」日本発達心理学会第27回大会ポスター発表、北海道大学、札幌。

有働真理子・高野美由紀・沼田里衣・梅谷浩子 (2016) 「ことばと音楽と物語 知的障害児・者の音楽的活動の場に見られる物語性」日本発達心理学会第27回大会ラウンドテーブル、北海道大学、札幌。

高野美由紀・有働真理子・光藤由美子・武田博子・上田直子・郷間英世 (2016) 「ストーリーテリングで特別支援」日本特殊教育学会 第53回大会自主シンポジウム67、東北大学、仙台。

有働真理子・高野美由紀・沼田里衣・梅谷浩子・原真理子 (2015) 「融合することばと音楽 知的障害児・者の音楽的活動の場に見られる対話の芽生え」日本発達心理学会第26回大会ラウンドテーブル RT\_6、東京大学本郷キャンパス。

Takano M. and Udo M. (2014) 'Trial production of Japanese-version multi-sensory stories for children with profound intellectual and multiple disabilities', 4<sup>th</sup> IASSIDD (International Association for the Scientific Studies of Intellectual and Developmental Disabilities) Europe Congress 17, University of Vienna, Vienna.

##### [その他]

Web サイト構築: ことばと音楽 de 支援 ~有働真理子・高野美由紀共同研究サイト~ (<http://mucollabo.jp/index.html>)  
同英語版: Where words and music meet <http://mucollabo.jp/en/index.html>

##### 主催セミナー等:

「知的障害のある人と楽しむストーリーテリング Nicola Grove セミナー&ワークショップ」平成27年5月2日・9日、兵庫教育大学 KHC、神戸。

「ニコラ・グロウブさんを招いて」平成27年5月14日、松山大学、松山。

「Vicky に学ぶナラティブ・インタベンション: 物語を育成するプログラム」平成27年10月、兵庫教育大学 KHC、神戸。

「知的障害のあるこどもとストーリーテ

リングをやってみよう！」兵庫教育大学  
KHC、神戸。

「学びのストーリーテリング 語りの実  
践と今後の発展」平成29年2月19日、  
兵庫教育大学 KHC、神戸。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

有働真理子 (UDO, Mariko)  
兵庫教育大学大学院学校教育研究科・教授  
研究者番号：40183751

### (2) 研究分担者

高野美由紀 (TAKANO, Miyuki)  
兵庫教育大学大学院学校教育研究科・教授  
研究者番号：70295666

### (3) 連携研究者

沼田里衣 (NUMATA, Rii)  
神戸大学国際文化学研究科・研究員  
研究者番号：10585350

### (4) 研究協力者

光藤由美子 (MITSUDO, Yumiko)  
松山おはなしの会会長  
梅谷浩子 (UMETANI, Hiroko)  
兵庫県音楽療法士  
原真理子 (HARA, Mariko)  
Researcher, Høgskolen i Hedmark  
(Norway))  
Nicola Grove  
OpenStoryTellers Founder  
Victoria Joffe  
Associate Dean, City University of  
London